開催趣旨

北九州映画サークル協議会は1953年、旧八幡市に「八幡映画クラブ」として誕生し、その後小倉や戸畑にも活動を広げる中で「北九州映画サークル協議会」と改称し、北九州未公開の世界各地の名作を中心に例会に取り上げ、現在も会員数620名で、戸畑と小倉で毎月上映会を開催し、北九州市の映画文化の向上に寄与しています。今年創立60周年を迎えるにあたり、現在「フィルムからデジタルへ」と急速に移行する映画の原点である「フィルム」に感謝し、映画鑑賞の原点を見つめ直すため、今回が初の福岡公演となるサイレント映画ピアニストの柳下美恵さんを迎えて、今年生誕110年である小津安二郎監督の傑作サイレント映画『浮草物語』(1934)のピアノ伴奏付き35ミリフィルム上映会を開催します。この公演を通じて、多くの方に北九州映画サークル協議会の存在を知っていただき、さらなる活動の発展をめざします。

柳下美恵(やなした みえ)さんについて

サイレント映画ピアニスト。武蔵野音楽大学ピアノ専攻卒業。1995年に朝日新聞社主催の映画誕生100年上映会でデビュー。国内の映画祭、上映会、大学の公開講座等の他、ボローニャ復元映画祭、ポルデノーネ無声映画祭、ボン無声映画祭、チュンムロ復元映画祭、SEAPAVAA(東南アジア太平洋地域視聴覚アーカイブ連合)会議、韓国映像資料院など海外公演も多数。欧米式のサイレント映画伴奏者は日本人初。紀伊國屋書店レーベル『裁かるゝジャンヌ』『魔女』の音楽を担当。『裁かるゝジャンヌ』はイギリスのユリイカレーベルからブルーレイで発売された。新作サイレント映画『アーティスト』(2011)のパンレット寄稿など執筆活動も行う。『映画館にピアノを!』『ダンスとピアノでサイレント映画』『ロスト・フィルム・プロジェクト』など多角的にサイレント映画の普及に努めている。2013年6月にはタイ国立フィルム・アーカイブでファンタジー活劇『バグダッドの盗賊』に伴奏、ワークショップも行った。映画に集中できる伴奏が信条。

小津安二郎(おづ やすじろう)監督について

1903年12月12日、東京深川(江東区)に生まれる。1923年撮影助手として松竹キネマ蒲田撮影所に入社。1926年演出部に移り、翌1927年時代劇『懺悔の刃』で監督デビュー。1932年に監督した『生まれてはみたけれど』はキネマ旬報ベストテンで第1位に選出されるなど、高い評価を得た。1936年自身初のトーキー作品『一人息子』は最後の蒲田撮影所作品ともなった。1943年に軍報道部映画班として南方へ従軍、この地で数多くのハリウッド映画を見る。1947年戦後第1作『長屋紳士録』で復帰。戦後は脚本家・野田高梧と組み、神奈川県茅ヶ崎市の旅館・茅ヶ崎館で脚本を執筆し、『晩春』、『麦秋』、『東京物語』といった名作を次々に発表。中流家庭を舞台に親子の関係や人生の機微を描き、独自のローアングルの手法を磨き上げ、いわゆる“小津調”を確立し日本映画界を代表する巨匠となる。1958年『東京物語』がロンドン国際映画祭でサザーランド賞を受賞したのを機に、海外でも注目を浴びるようになる。同年には紫綬褒章、翌1959年には芸術院賞を受賞し、映画人として初の芸術院会員となる。世界レベルで評価が高まる中、癌に冒され、1963年12月12日、60歳の誕生日に逝去。死後もその評価は高まる一方で、大船撮影所の監督は勿論、周防正行、市川準、竹中直人ら日本の監督たちにとどまらず、トリビュート・フィルム『東京画』を撮ったヴィム・ヴェンダース、ジム・ジャームッシュ、アキ・カウリスマキ、ホウ・シャオシェンをはじめとした世界の監督たちにも大きな影響を与え続けている。2012年、英国映画協会発行の「サイト・アンド・サウンド」誌が発表した世界の映画監督358人が投票で決める最も優れた映画で、『東京物語』が1位に、批評家846人の投票では3位に選ばれた。

『浮草物語(うきくさものがたり)』について

1934年11月23日公開・第31作目・白黒・無声・86分・松竹蒲田作品・35ミリ

[出演] 坂本武、飯田蝶子、三井秀男、八雲理惠子(惠美子)、坪内美子、突貫小僧、谷麗光、西村青兒、山田長正、青野清、油井宗信、平陽光

[原作] ジエームス槇 [脚本] 池田忠雄 [監督] 小津安二郎 [撮影] 茂原英朗 [美術] 浜田辰雄

小津安二郎が原作(ペンネーム「ジエームス槇」)と監督を担当したサイレント作品で、下町人情劇“喜八もの”の第2作。池田忠雄が脚本を執筆した。『生まれてはみたけれど』と並ぶ無声映画時代の傑作。後の小津作品につながる萌芽が随所に見られる。物語は1928年のアメリカ映画『煩悩』を下敷きにし、1959年には『浮草』というタイトルで小津自らリメイクしている、お気に入りの作品でもある。
ドサ回りの一座の座長・喜八は、むかしの女のいる田舎町に興行に行く。女には、喜八の子供がいて、立派に成長し、喜八をおじさんだと思い込まされている。一座の看板女優で、喜八の情婦でもある女は、昔の喜八の女に嫉妬して、妹分の女優に喜八の息子を誘惑するようにしむける。騒動がおこり、息子はおじさんだと思っていた喜八が実の父だと知ってしまう……。旅一座の哀感と、人々の細やかな心情とを小津安二郎ならではの淡々とした空間に描いている。こんな市井のささやかな出来事を、小津は精緻を極めた演出で淡々と抒情的に描き、旅の哀愁を全編にみなぎらせた。小津安二郎は俳優たちのしぐさをいちいちことこまかに指示して演出しているので、まるでパントマイム劇を見ているような、こまやかで微妙な動作の流れが生み出されている。そこが特にサイレント時代の小津作品の楽しさである。

(C)1934 松竹株式会社

(C)1934 松竹株式会社

(C)1934 松竹株式会社

(C)1934 松竹株式会社